

第9回 三稜会懸賞論文



第68号 三稜会会報別冊

稲葉真弓賞 特集

令和元年7月9日
 発行 三稜会
 (津島高校同窓会)
 事務局(津島高校内)
 〒496-0853
 津島市宮川町3-80
 電話 0567-28-4158
 発行人 北角 浩一



令和元年5月25日(土) 表彰式

最優秀賞 三田村さんの表彰時の御礼の言葉

この度は、このような立派な賞をいただき、大変嬉しく思っております。

この論文を書くにあたり、多くの方からご協力いただきました。本当にありがとうございました。自分の考えや意見が伝わり、このように評価していただくことは貴重な経験で、自信を持つことにも繋がりました。これからも世の中に関心に向け、自分の意見をしっかりと持ち、それを伝えられる人になりたいと思います。

今回このような機会を設けてくださった津島高校三稜会の皆様をはじめ、多くの方々に感謝の言葉を申し上げます。本日は本当にありがとうございました。

第9回 稲葉真弓賞 テーマ『日本』 審査結果

応募総数 津島北高校 五条高校 稲沢東高校 津島東高校 美和高校
 553点 清林館高校 愛知黎明高校 稲沢高校 杏和高校 津島高校

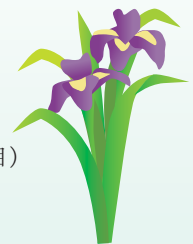
入賞作 7点 …入賞された皆さん、おめでとうございます。…

〈最優秀賞〉1点 清林館高校 2年 三田村明沙美さん (写真 中央)
 〈優秀賞〉1点 清林館高校 2年 栗山 希美さん (写真 右から2人目)
 〈佳作〉5点 稲沢高校 3年 齋藤允由樹さん (当日 欠席)
 津島東高校 2年 下ノ蘭真琴さん (当日 欠席)
 (表記学年は 愛知黎明高校 2年 一色アミナさん (写真 左から2人目)
 応募当時のもの) 津島高校 1年 小平 愛佳さん (写真 右端)
 津島高校 1年 高橋 誠子さん (写真 左端)

- ・入賞者全員の高校名、氏名と作品を津島高校三稜会のホームページに掲載しています。
- ・入賞者本人による朗読を、クローバーTVとFMななみ(77.3MHz)にて放送の予定です。
 クローバーTV 7月11日～20日「特番」 121チャンネル…夜7時～ 111チャンネル…朝10時～、夜11時～
 FM77.3 8月放送予定(日時未定)

【協賛団体】(株) ヨ シ ツ ヤ クローバーTV・エフエムななみ77.3MHz
 虎ノ門法律経済事務所 (株)三和スクリーン銘板 (株)原ネームプレート製作所
 (株)日本一ソフトウェア 協和交易(株)

【後援】(株) 中 日 新 聞 社



第9回 稲葉真弓賞 受賞作品

テーマ【日本】

最優秀賞

「恵みと幸福」

清林館高等学校

二年 三田村明沙美

普通より良い条件・環境を与えられている状態を「恵まれている」と言い、不平や不満がなく心が満ち足りていることを「幸福」と言う。この二つの言葉を「日本」に当てはめて考えてみる。日本の多くの人は、毎日着る服があり、空腹を満たすだけの食料があり、雨風をしのぐことができる家がある。そういう点で、日本は国民が健康で文化的に最低限度の生活を送ることを保障された国だと言える。これはまた「恵まれている」とも言う。

一方で国際連合が今年発表した世界の幸福度ランキングの日本の順位は第五十四位である。これは世界基準で見た場合、日本の幸福度が極めて低いことを表している。つまり日本は、生活などに恵まれた国であっても、手放し

に幸せな国であるとは言えない状況にあるということだ。私はその原因を日本人の欲と日本の発展に注目して考える。

人間は常に欲をもつて生きている。その欲は千差万別である。しかし、国単位での欲について考えてみると、欲の種類には国ごとに特徴があると思う。例えば、パキスタンには、すべての男女が平等に教育を受けられる国にしようとして戦った少女がいる。それはパキスタンが満足に勉強させてもらえない国であるからこそ教育を受けたいという一つの望み、いわゆる欲が生まれたのである。

では、日本だったらどうだろう。彼女のように教育を受けたくて、それを世の中に訴える人間はいらるだろうか。私はいないと考える。なぜなら日本は、中学校までは義務教育、高等学校や大学においても、国からさまざまな支援が受けられるなど教育に関して非常に前向きな考えをしている国だからだ。

このようなことから、人は本来今あるものでそれが十分に足りていれば、それ以上のものを望まない性質があると私は考える。しかし、今の日本は実際にあるものに満足しきれず、より質の高いものを要求するようになってきているように感じる。私たち高校生が普段の生活を送る中でもそのように実感させられることがある。例えば、今

若者の間で流行中の無料で写真や動画を共有することが出来るインスタグラムの中の「インスタ映え」という言葉。これは食べ物や風景の写真を一際見映え良く撮影し、多くの「いいね」をもらうというものだ。以前私はこんなニュースを耳にした。それはインスタ映えすると話題になったアイスショップのゴミ箱に、大量の食べ残しが捨てられているというものであった。このニュースから分かることは、多くの人が

インスタ映えを狙い素敵な写真だけを撮り、食べ物を無駄にしまっているということだ。つまり、食料など十分にある日本では、食べるという行為だけでは満足し切れず、写真映えするものを欲しがるという欲の追加が起きているという事実が存在するということだ。

欲の追加がなされるということは、人の心が満たされるまでの距離が遠くなっていくことを意味する。きちんと三食食べられなかったかつての日本では、美味しいご飯が食べられることに満足し、心が満たされた状態であったのに、今では例にあったように、それに加えて周りからの評価を得られてやっと満足するという状態に至る。つまり、日本のように恵まれた環境にいればいるほど、私たちは心の満足という幸福を感じにくくなっている傾向があるということだ。その結果として日本

の幸福度は他国と比べて低くなっているのだと考える。

もちろん、一切の欲無くして、今の日本は自分の国を発展させることを成し得なかっただろう。私たち日本人の祖先が、日本を便利な国にしたい、自立できる国にしたいと思う欲があったからこそ、日本が現在のような発展した国になったと考えるからだ。その上で欲は大変意義のあるものだと考えられる。

しかし、一方で私は国の発展には限度が必要だと思う。例えば、世界全体で自動車産業が盛んになり、世界の七十億から八十億の人が同じだけの車を運転することになったら、私たちが呼吸できるだけの酸素は、一体どれだけ残るのだろうか。このような行き過ぎた発展は、時には私たちの必要最低限の生活までも奪ってしまう可能性がある。日本人の欲は日本の発展を支えるものではあったが、先進国と言われるまでに成長した今の日本の欲は、少し傲慢であるようにも感じられる時がある。その傲慢な欲はこれからの日本を不幸せな国に導く可能性もある。

だからこそある程度満足した生活を送ることができる日本に暮らす私たちは、必要最低限のもので満足することを知り、感じる必要がある。つまり、国の発展は、国民が必要最低限のものでも満足することができるようになって

て初めて本当の意味で幸福な発展と言えるのではないだろうか。

「貧しい人とは、少ししかものを持っていない人ではなく、もっともっとも無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ。」というウルグアイの元大統領であるホセ・ムヒカ氏の言葉は、私に新たな考えを与えてくれた。彼がここで伝えたいのは、貧しさをお金という一つの括りで考えるのではなく、心の面からも考えることができるということだ。私たちが日々あたりまえのように暮らしている日本は貧しいのだろうか、裕福なのだろうか。それぞれ自分の心に問いかけてみてほしい。そして、これまでの生活や行いを見つめ直してみたい。きっと日本人の誰もが貧しい人になる可能性があるだろう。

皆が幸せだと胸を張って言うように、日本で生活する人は恵まれた国に生まれたことに常に感謝し、幸せなことなのだと思ひ、その考え方を身に付けることが大切であると私は考える。そうすれば、日本は生活が恵まれた国であることと比例して、本当の意味で幸せな国であることを実感できるはずである。

私は「日本は幸せな国ですか。」と問われたら、迷わず「はい。」と答えたい。

優秀賞

「日本」を離れて 知った「日本」

清林館高等学校

二年 栗山 希美

私は「日本」に対して好感がもてず、むしろ批判的であった。日本語という自国でしか話されていない言語を使い、島国で周囲から孤立したような状態に堅苦しさを感じていたのだ。「窮屈な日本を抜け出して、海外に行きたい。」

「英語を身に付けてグローバルな社会で活躍したい」という思いが徐々に強くなり、私は一年間留学することを決意し、十七歳の秋、アメリカのテキサス州に飛び立った。その経験を通して、初めて「日本」という生まれ育った母国を離れて気付いたことが二つある。

一つ目は日本と海外のおもてなしの違いである。日本のおもてなしは、オリンピック誘致のIOC総会で世界的に有名になり、今ではいろいろなところで、来日した外国人に満足してもらうための取り組みがなされている。私の中学や高校に海外からの生徒が来たときは、先生から紹介があり、日本語を上達させるためのクラスが用意されていた。しかし、私が留学したときは特に紹介されることも英語力向上のため

めのクラスもなく、一人の留学生として現地の生徒と同様に学校生活を送った。始業式のようなものもなく、学級制でもないのだ。初日の一限目から授業が始まるのだ。日本では留学生がなじみやすいように周囲がサポートしていくのが一般的である。それに対してアメリカでは、たとえ留学生であつても、皆が同じ生徒であると考えられていた。初めのうちは戸惑ったが、特別な扱いを受けないために自分から話しかけていく積極性が身に付いた。

また、アメリカで出会った店員は、誰も皆、初対面である私に英語で、しかも以前の友人であるかのようにフランクに話しかけてきた。私は現地の人と英語でコミュニケーションをとることができてうれしかった。しかし、日本人は外国人と出会ったとき「相手の母語で話さなければ」と思いがちだ。私は日本人の相手を気遣う心と、アメリカ人のフレンドリーで対等な人柄を身をもって感じ、相手を思いやる気持ちと同じでも対応が全く異なることに驚いた。

では、日本のおもてなしを海外の人はどう思っているのだろうか。帰国後は私はインターネットで「来日した外国人が日本人から話しかけられたときどう思ったか」という記事を見た。「英語で案内してくれて助かった」「英語で説

明してくれたから分かりやすかった」というようなポジティブな意見も見られたが、私の印象に残っているのは「日本に来たからには日本語を使ってみたいのに、英語で話しかけられてがっかりした」や「英語学習のルーツとして使われているような気がしてならない」というようなネガティブな意見も多かったということだ。日本人が良かれと思っているおもてなし、私がありまえであると考えていた気遣いは、育った国の文化や来日の理由が異なる全ての人に受け入れられるものではないと感じた。だからこそ日本は、マニュアルどおりの通り一遍なおもてなしではなく、状況に合わせたおもてなしをする必要があると考える。

二つ目は、日本のことが外国人にあまり知られていないということだ。留学生生活も半ばを過ぎたときのことである。通っていた公立高校では、言葉の壁はあったが共通の趣味を通してたくさん友人ができた。英語で授業を受けたり、自分の考えを伝えることはとても新鮮で、毎日が充実していた。そんなある日、友人の一人が私に「日本ってどこにあるの」「日本にはどんなものがあるの」と尋ねてきた。これらの言葉に驚かされたことは今でも鮮明に覚えている。

テレビや雑誌でよく見られるような、

来日した外国人観光客へのインタビューでは、彼らは自国では見られないような日本特有の美しい風景や日本食の魅力など、日本へのあこがれを楽しそうに目を輝かせながら語っていた。私はたいていの人は日本のことを知っているのだと思いこんでいたため、少なからずショックを受けた。私が出会った人は日本の国名やアニメのことは知っているけれど、それ以外は知らないという人がほとんどだった。私は友人に、持参した優美な古都の写真を見せたり、日本のお菓子を一緒に食べたりしながら母国の紹介をした。彼女たちは興味をもって私の話を聞いた。時には、私が教えた日本語の挨拶や文字を使い、日本についてもっと知りたいと言ってくれた。私はその時、日本の話をする楽しさ、そして自国について知ってもらい喜びを感じた。

私は今回の留学で、アメリカのテキサス州の生活を体験したが、それは広大なアメリカのほんの一部、世界のほんの一端に過ぎない。世界にはもっとたくさんの考えた方をもった人がいて、もっとたくさんの文化があるだろう。

留学に行く前、私は日本に対して批判的なイメージをもっていた。だが、人に伝えることで、今まであたりまえだと思っていた特有の文化は、島国だからこそ他国の影響を受けずに伝承され

ている日本の良さであることに気付いた。今、私にとって「日本」は大好きな母国である。私には「グローバルな社会で活躍する」という夢がある。他国やそれぞれの地域の文化を理解しつつ、日本を離れてみたからこそわかる日本の良さや魅力を世界に発信していきたい。

佳作

「日本」

愛知黎明高等学校

二年 一色アミナ

生まれた時には神社で氏神様に健康と長寿を祈り、人生最大の行事ともいうべき結婚式では、教会でイエスの前で愛を誓い、そして人生最後の幕引きにはお寺で仏にすがる。お盆には先祖にお供えをし、クリスマスをも祝う。それが日本人、そして現在の日本の文化だ。特定の信仰をもつわけでもなく、何か忌み嫌うわけでもない。つまり、無宗教というわけだ。もちろん一億三千万人全員がそうだというわけではないが、日本で普通に暮らしていく中では、そうでない人を見つける方が難しいかもしれない。二〇一二年にアメリカの調査機関が発表した統計によると、

日本人の約六割が無宗教だという。

「無宗教」それは日本に生まれ、日本で育ち、日本で働き、日本で一生を終える人々にとってはあまりにあたりまえで日常的なことかもしれない。しかし、ひとたび海の外に出てみれば、それは日本の中だけのあたりまえであって、世界的にはいかにあたりまえではないことなのかが明らかになることだろう。そこで今回私は、日本と宗教の関係について世界と比較しながら考えてみた。

私は父がスリランカ人で、母が日本人のいわゆるハーフとして、ここ日本で生まれ育った。小学校卒業後は一時期、父の国であるスリランカに住んでいた時期もあるが、基本的には日本で暮らしている。そして日本では珍しいイスラム教徒だ。私はそのことに關して誇りをもっているし、自分の境遇を嘆いたことも一度もない。ただ、日本ではイスラム教徒と聞くと、四年くらい前に話題になったイスラム過激派組織ISやその他のテロなど、あまりいいイメージがないのは確かで、そしてそういう過激な思想をもつ人たちがいるのも事実だ。しかし、注目してほしいのは、「過激派」という部分である。つまり、一般的なイスラム教徒ではなく、ごくごく一部の少数派だということだ。事実、イスラム教徒の中でもそ

ういった人たちがイスラム教徒だと認めたくない、同じだと思われたくない人は多いし、私もそのうちの一人である。そういった意味では、日本でムスリム（イスラム教徒）であることは、先入観をもった目で見られるというところで、デメリットしかないように見える。しかし、私はこの無信仰の人が大半を占める日本に住むムスリムでいられて良かったと感じている。なぜなら、無宗教の国、日本だからこそその利点、メリットも少なからず存在するからである。

宗教間の争いごとは、国や時代に関係なく、昔から常に起こってきた。一神教として代表的で、今ではもっとも名の知れた宗教であるユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教でさえも、新しくできた時には例外なく迫害された。そういった宗教戦争として代表的なものの一つが、十一世紀から十三世紀にかけて行われた十字軍のイスラム遠征だ。ヨーロッパのキリスト教国が聖地エルサレムを当時のイスラム教国から奪い返さんと仕掛けていた戦争だが、これはパレスチナ問題として、今でも続いていると言っても過言ではない。このように、歴史上でも今現在でもなお、宗教というのは領地や財と同じように大戦争の火種としては一般的なものである。その一方で、日本の歴

史上で起こった宗教戦争といえ、江戸初期に幕府がキリスト教を禁止したために天草四郎が起した島原の乱はよく知られているが、それ以外は中学校の歴史の授業に出てくるかこないかのものばかりで、あるとしてもそれらは仏教間だけのものだ。そして、現在に関しては、宗教が原因の紛争や争いごとなどが日本で起こるとは誰も考えないどころか、そもそも宗教に関する認識（関心？）がとても低く、宗教などという言葉は教科書上でしか見たことがないという人も少なくないだろう。

これが私の考えるメリットの一つだ。つまり、宗教に関しての争いごとが極端に少ない。もっと碎いて言えば、日本は平和な国なのだ。これがどれだけすばらしく、普通にはなし得ないことなのかは世界を見ればはっきりと分かる。例えば、先程挙げたパレスチナ問題もそうだし、私の父の国であるスリランカを見てもそうだ。スリランカには仏教、イスラム教、キリスト教などのさまざまな宗教の人が暮らしているが、その中でも仏教徒とイスラム教徒との紛争はかなり前から続いており、一時は落ち着いていたが、最近は仏教徒の大統領の影響で悪化してきたと聞く。無信仰であるがゆえにさまざまな信仰をもつ人を分け隔てなく受け入れることができる。それが日本の無宗教の特徴、また長所だと思う。どんな人

に対しても、敵対する必要が全くないので、そういうものだとするなり受け止めることができる。そういった考え方が、日本の平和を保ち、守っているのではないかと私は考えている。このように、メリット、デメリットが考えられた上でも初めに述べたとおり、私は日本という無宗教の中でイスラム教徒であることを誇りに思っている。そして、これから先も辛いことや苦しいことはたくさんあると思うが、自分がイスラム教徒であることを胸を張って言えるように生きていきたい。

佳作

日本の未来を担う 「バディ」と接して感じた事

津島高等学校
一年 高橋 誠子

私は偶然「日本」という恵まれた国に産まれ、何不自由無く生きることができている。

食事は三食しつかりとり、あたりまに学校に行くことができる。街を歩いていて、頻繁にスリに遭うこともなければ、自動販売機ごと盗まれたりするような治安の悪さもない。こんなにも何も考えず過ごせることを幸せに思う。

昨年の秋、念願が叶い、初めて国際

交流をすることができた。相手国はタイで、私のバジバディは二つ年上の日本語を勉強している女の子だった。彼女は日本が大好きで、日本食は喜んで食べ、アニメや漫画、アイドルも私よりも良く知っていた。彼女と話していると、自分が思っていた以上に、日本に関心をもつてこなかったことに気が付かされた。「Do you know?」に「No」と答えている自分を恥ずかしく思った。しかし、私だけに限らず私たちの世代のほとんどの人が、そうなのではないだろうか。

まず第一の原因は、学べる・知ることが出来る環境があることがあたりまえになっているところにあると思う。タイは発展途上国であり貧富の差が激しい。そのため、貧しい家庭で育った子どもたちは、学校へ行かず働かなければならない。その現状を知っているからこそ、学校へ行くことができる子どもたちは必死に勉強する。

また、将来のビジョンがはっきりしている印象も受けた。私のバディの夢は「日本でガイドをして働いて、もつとタイのことを発信し、好きになってもらうこと」だそう。バディもそうだが、自分の国をもっと発展させたい、貧しい人たちを助けたいという夢をもつ子どもが多いそうだ。

日本はどうだろうか。学歴社会の今、小さい頃から塾に通って勉強している

人もいれば、学ぶことに消極的な人もいる。学力で、その人の人格まで見極められてしまうため、名門の学校は、いわゆる高級ブランドで、社会に出る上で武器になる。大学のためにではなくて、将来のために勉強することが必要である。今私たちに必要なことはたくさん日本について学んで、日本をもっと好きになることではないかと思う。

この頃、ロボットが普及して、手作りが少なくなってきたり、若い世代に伝統的な行事が引き継がれずに、廃れてきている。手間や時間、費用がかかるとやらなくなってしまう。逆に、商業ベースの行事は年々盛り上がりを見せている。恵方巻は、元々あった行事だが、コンビニエンスストアの宣伝力で広がった。また、お菓子会社から、西洋の行事であるバレンタインデー、ハロウィン、クリスマスが広がった。時代とともに、それぞれの価値観、生活観が変わってきて仕方のない現象だ。しかし、伝統は今まで何かしら意味をもって受け継がれて来たものであって、それを私たちの時代で廃れさせてはいけないと思う。また日本らしさは、海外へもPRできるので大切だと思う。

タイは宗教への信仰が深く、特に礼儀については各家庭で厳しく躾られているそうだ。食事の場で水がセルフサービスの際は必ず自分よりも周りの人

の水を先についだり、席を譲ったり、公共の場でいつも視野を広くもって行動していた。本当に優しく親切な人ばかりだった。

日本にも良い所はたくさんある。おもてなし精神や、時間厳守など。しかし、駅で見るサラリーマンたちは、いつも眉間にしわを寄せ、小さい子やお年寄り関係なしに押し分けて入ってくる。全員ではないが、道で転んだ人を見て見ぬ振りする人も少なくない。自分中心思考の人が増えると社会が、日本自体がそうなってしまう。大切なことをつい忘れてしまいがちである。

タイと日本を比較して考えてきたが、やはり日本ほど良い国はないと思うし、周りの国の人にも愛される国に住んでいることは、凄く誇りに思う。だから、周りの国の人々以上に、日本人である私たちがこの国をもっと愛すべきではないだろうか。

今の日本を変えるために必要なことは、一人一人が、今ある現状をあたりまえとは思わないこと・人を思いやる気持ちをもつこと・日本らしさを大切にすることだと思う。恵まれた国に産まれたことを感謝し、一生懸命生きることが、きつと日本の更なる発展に繋がる

第10回 三稜会懸賞論文 稲葉真弓賞

テーマ「**新時代**」にて募集します。

募集期間 2019年11月1日～2020年1月31日

応募資格 西尾張地区の公立私立高校生

詳しくは、10月に配布予定の募集ポスターに掲載

と思う。人を思いやる気持ちは、少子高齢化社会の日本にとってなくてはならない。また、被災地復興支援など支え合うことができる。日本らしさを大切にすることは、いくら各国の文化が入って来ても決して個性を失わない、魅力的な国であることにつながる。

次世代を担う私たちが、真剣に日本と向き合うことで、未来が変わる。後世のために、日々勉強に励んでいきたいと思う。

審査委員会講評

審査委員長 大野 広樹

今回一〇校から五五三点の応募がありました。テーマは、自分たちが住んでいる「日本」でした。しかし、応募作品を読んで、私たちは意外と日本のことを実は知らないということが分かってきました。多くの作品が、日本の文化のすばらしさと、それを継承していかなくてはならないという話に終始していたように思います。

自分の国を悪く言う人はいないでしょうが、ただ礼賛するだけでなく一度立ち止まって振り返って日本を眺めてみる。その中で見えてくる日本を分析して、さらに良くなる手だてを考える。そのような冷静な目と論理の展開で日本をとらえた作品が、今回最優秀賞に選ばれた三田村さんの作品でした。

「日本のように恵まれた環境にいればいるほど、私たちは幸福を感じにくくなっている」という言葉に凝縮され、「日本の欲は、少し傲慢である」とまで言い切っています。しかし彼女はそこで終わらずに、「幸せを心の面からとらえることの大切さ」を唱え、日本にはその可能性があることを述べて終わっているところに、高校生としての前向きな姿を感じることができました。

優秀賞に輝いた栗山さんの作品は、他国での経験に基づいて書かれており、非常に説得力のある文章でした。日本の文化をそのまま良しとせず、あえて日本を否定するところから始まり、そうすることによって真に日本とは何かを考えようとする覚悟と決意が伺える文章でした。留学経験を基にした題材もさることながら、わかりやすい論理の展開が読むものを素直に納得させるものがありました。そしてなにより導かれた結論が感覚的で抽象的なものではなく、具体的に自ら日本の良さを発信していきたいという前向きな高校生らしい意見で終わっているところが高く評価されました。

その他、佳作に選ばれた作品の中には、日本以外の国での経験や、外国人との交流を通して日本を考えた作品があり、外から眺めてみることによって本当の日本の姿が見えてくるのだということを、あらためて私自身気づかされました。

参加していただいた学校や生徒のみなさん、またご指導いただいた先生方、本当にありがとうございます。来年度第一〇回の節目にふさわしい作品が集まり、この懸賞論文がますます発展することを願っています。今後ともよろしく願っています。

他の3作品と第1回からの最優秀賞と優秀賞作品は、三稜会ホームページに掲載してあります。ご覧ください。

三稜会ホームページ <http://www.sanryokai.com>

至宝 平野真弓さんの大学ノート公開(第3回 高校3年生編)
～すさまじい創作意欲～

平野(稲葉)真弓さんが丁寧に几帳面にしたための大学ノートは、高校時代はおそらく6冊だっただろうと推測されます。「詩・創作文(1)1965(4月)～1966.4.3」(高校1年時)、「詩・創作(2)1966.4.5～1967」(高校2年時)、「作品集(5)〈詩、短詩、短歌〉S42 9/26～S42 12/16」「作品集(6)〈詩、短歌〉S42 12/19～S43 5/17」(高校3年時～卒業時)というように、(1)から(6)までとノートの表紙に記されているからです。しかし、遺品としては上記4冊のノートが真弓さんの津島高校時代のものとしてあり、残念ながら(3)(4)の2冊(おそらく高校3年時前半のもの)は不明です。

一昨年(高校1年生編～乙女心の変化を追って～)、昨年(高校2年生編～真弓17歳 うかがわれる詩人への強い決意～)と2回にわたって作品を公開してきました。今号では、高校3年生の作品を紹介するのですが、真弓さんの高校時代の総括も含めたものとして公開してみます。高校3年間の創作詩で、同タイトルの詩が8種類20作品ありました。これらのうち紙面の都合もあって、3種類9作品を載せることとします。創作年の移ろいによる高校生である詩人の心的変容等、読み味わってみてください。

春
春がそっとやってきた
めきあし さしあし しのいあし
でも やっぱり見つかった
春を見つけたその子は 水仙の花に
にっこり笑ってみせた
誘うしぐさで無邪気に笑ったその顔が
まるでピンクの春の精のようだったことを
私は忘れることができない
春は明るく笑いをまき散らした
まっかに燃える太陽に 黒々と硝子たる大地に
また来ましたよ ともども言うように
春のお伴は やわらかな風
春の匂いは ヤシイ名もない花の匂い
野山に花は咲きこぼれ
すべての生きものは 幸福そうに踊り回る
おお 春よ うろわしき春よ

1965(昭和40)年 高1(直筆)

春
あれはたしか光の散乱だろうか
乾いたわらを持ち上げ
小さな羽虫が
無数にとび交うのをみたのは
春が来たと町をゆく人が
言っていたから
帽子のつばを広くして
生垣の隙間を
するりとぬけられるようになると
空の青さが不思議な無限色にみえ始め
しめった苔の上に片ひざについて
弟はローラースケートのひもを結ぶ
からからと路の響きをさせて
風のように飛び去ってゆくのは
あれはたしかに私の弟だろうか
静かな雪だけが
すべてのものに訪れ
私の中でも春の雪崩が
ゆったりと動きを始めた

1968(昭和43)年3月3日 高3

バラ

たとえどんなにあざやかなバラでも
いつか枯れてしまうのはいやだから
せつせと絹のバラを
かごいっぱいにつくりました
でも あなたに對する
私の幼い心は いつかは
きつと枯れてしまうのに
それでも私の心をこれ以上つくることはできない
心のかごはいつも用意してあるのに
入れるものがないなんて かわいそう
大切な大切な神さまの忘れもの
それ故に少女は悲しいのです

ばら

春の日ざしに
燃えるようなまなざしを射て
少女は窓から
黄色いバラを授げる
それは冬につかれた
心のなきがらなのだという
鳥のように舞って
おちるバラの
弱々しげな一筋は
やがて道いっぱいの
棺の上におちてゆく
そして少女は
また新しく装いを始める
今度はピンクのバラを
さかせるのだといって……

1966(昭和41)年6月13日 高2

1967(昭和42)年3月3日 高2

冬ばら

息することを忘れきったような
細胞の裏側で
冷たい霜に耐えながら
何を想っているのか
苛酷にも
たやすく裂ける冬のつぼみは
固いばかりで
はかなくもろい
みずみずしい肌のうるおいを
季節に残した冬のばらよ
パリパリと乾いた葉々は
棘をかかえてひっそりと眠る
地の奥底で
たしか生きているはずの樹液は
太陽の色と共に
めざめはじめることだろう
黒々と沈んだ夜を忘れるごとくに

1968(昭和43)年1月10日 高3

黄色いバラ ― S に ―

机の上に置かれたつぼの下に
一枚きりのバラの花びら
あなたのどこかで吹く風が
忘れていったバラの花びら
黄色い小さな花に
私はくちびるのあとを残し
そつと同じところに置いた
あすの朝
あなたは机の上に
はるかな少年の日を想うだろう



1968(昭和43)年3月末 高3

冬 薔 薇 (改作)

息することを忘れたような

細胞の裏側で

霜の朝がゆとりと地平に登る

季節も

たやすく裂ける冬の薔薇は

固いばかりの触感で

はかなくもろい

みずみずしい樹液の香りも

季節に残した冬の薔薇よ

春になればせりの葉の

湿地に息吹くことも

夏になれば

人魚のような足の氾濫を欲する

山に憧れ 海を求め

私の絶え間ない感動は

電線の寒い空の下で幾万もの根毛が

春の歓喜を待つも

沈みきった地の湿りに

ああ わたしは待ちこがれている

光の乱舞し花の燃え上がるのを

耐えきったあの重みが海をゆく

船のごとく波にきらめくその時を

柔い触手ながら光波の下に

赤き花弁を開く薔薇よ

地を這う羊歯の茂みに

鋭い棘を落とし

私の腕に抱きこまれるその日に

冬の衣を洗い去り

白き生誕の根毛をぬらせ

緑陰の新芽の中で

その樹液をしたたらせよ

乾いた夕暮れの闇で

暦をぬりつぶす

りんりんと光る冬の薔薇よ

ああ わたしは待ちこがれている

光の乱舞し花の燃え上がるのを

耐えきったあの重みが海をゆく

船のごとく波にきらめくその時を

冬 薔 薇 (改作)

息することを忘れたような
細胞の裏側で

霜の朝が地平に登る
固いばかりの触感で

たやすく裂ける
冬の薔薇は

はかなくもろい

みずみずしい樹液の香りを
季節に残した冬の薔薇よ

春になればせりの葉の
湿地に息吹くことを待ち望み

夏になれば

人魚のような足の氾濫を欲する
山に憧れ 海を求め

私の絶え間ない感動は

電線の寒い空へとすくいこまれる
凍った土の下で幾万もの根毛が

春の歓喜を待つ そのように

ああ わたしは待ちこがれている

光の乱舞し花の燃え上がるのを

耐えきったあの重みが海をゆく

船のごとく波にきらめくその時を

ああ わたしは待ちこがれている
沈みきった地の湿りに

光の乱舞し花の燃え上がるのを

耐えきった「季節」の

重みが海をゆく船のごとく波に

きらめくその時を

柔い触手ながら光波の下に

赤き花弁を開く薔薇よ

地を這う羊歯の茂みに

鋭い棘を落とし

私の腕に抱きこまれるその日に

冬の衣を洗い去り

白き生誕の根毛をぬらせ

緑陰の新芽の中で

その樹液をしたたらせよ

乾いた夕暮れの闇で

暦をぬりつぶす

りんりんと光る冬の薔薇よ

ああ わたしは待ちこがれている

沈みきった地の湿りに

光の乱舞し花の燃え上がるのを

耐えきったあの重みが海をゆく

船のごとく波にきらめくその時を



1968(昭和43)年1月11日 高3 (直筆)

月のはなし

お月様に
白い水晶の谷にかかっている
階段があったういいな
泣きたくなう ぐんぐん
登って行けるもの。

お月様にも虹あまかしう
お馬さんごっこしたいな
それとも虹のかけらで
くいかぶりつくうか
あの人かまぶしくなうに
くすんだ色で。

もしお月様にも夜があつたういいな
くすんだくもりがうすのうこつて
歩きたいもの
けんかしてつらくなった時。

「五カ月のほし、こにこしかけて
月の砂漠を歌うたう
だれかふりむいてくれるかしう」

1966(昭和41)年2月15日 高1(直筆)

月が早

改作

銅びきの手を通り
墓地をぬり
苔のじいね水溜を踏み
かいくまに墓石の上
別れた友だちの名前を刻んでいた
しほし
潮が満ち 次が輝き
白い差ま貝が海はかま
へり返す くり返し
うう潮騒のようは……

妹も もうかまうう
蜻蛉は地に落ち
風も凧いんでいる
私の足も もうこんなになれてしまふ。

千代子お 石だたみを
カタカタと 泳ぎながら
私は妹の瞳をみてる
早リやく 月の明りが
白いほんほりのように
ゆるいで止まり ちんたきゆうぐ

地の果てに
狂おしき月が赤々とないく
ああ 今夜
野火にあおられた煙にひせて
月の触手がまぶしすぎる

1968(昭和43)年2月11日 高3(直筆)

◇選定徒然◇

第一回のノート公開では、乙女心の変化を追ってと題して、一二編の詩を紹介した。高校時代の作品ノート四冊には詩三四六編、短歌七七首など、膨大な作品が収められていたが、その最初を飾る「願い」と題されたお父様追慕の詩や、「三角関数なんてイヤダナ」と吐露した、数学嫌いの人には親しみを感じる散文を載せた。高校一年時の作品の特徴は色の多用で、最も多かった「白」は、お父様の形容であると思われる。

第二回のノート公開は、高校二年時から詠まればじめた短歌を七首紹介し、時節柄七夕に飾ってみた。またもうひとつの特徴として、連詩が挙げられる。うち「五月の組曲」と題された四連詩を載せた。こうした連詩はこの後のノートにも散見し、韻文と散文との交錯を試み、楽しまれている稲葉さんを感じた。

高校三年後期のノートからは、創作意欲のすさまじさ、迫力に触れた。その勢いはノートを飛び出し、いくつかの出版社への応募となつて現れた。この応募作品群の紹介は来年発行予定の「稲葉真弓賞一〇周年記念誌」(仮称)に譲り、今号では、高校時代全三四六編中同じタイトルで詠まれている詩が複数あり、その一部を紹介してみた。稲葉さんの感性遍歴とでもいふべきものを感じていただけたであらうか。

三回にわたって「至宝 平野真弓さんの大文学ノート公開」を連載したが、これを機に平野(稲葉)ノートをめくる氏のあらわれんことを祈念してやまない。(M)